
Fate/another EXTRA -**敗北踏破**

甘味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/another EXTRA - 敗北踏破

【Nコード】

N5456S

【作者名】

甘味

【あらすじ】

戦争を望み、聖杯戦争の門を叩いた彼女の前に現れたのは『スーツ姿の白人男性』だった。(Fate/EXTRAの再構成小説、可能な限り脇役にライトを当てることをテーマにしています。また、クトゥルフ神話成分は薄目となっております)

学園生活4日目午前中1（前書き）

A t t e n t i o n

再構成を基本とし当作品は展開されていく予定で御座います。

その際に当作品には自己解釈や誤差、矛盾などが多分に出る危険性が含まれておます。

原作が第一の方や文体が肌に合わない方、細部の矛盾を嫌う方は残念ながらお楽しみ頂けない可能性が御座います。

作者の妄想小説になりますが無卒ご了承ください。

学園生活 4日目 午前中 1

世界は無味無臭、何もかもが乾いている。

そんな気がした。

何でそんなに乾いてるのか、とか。何でそんなに味気ないのか、とか。

今の自分に疑問を挟むまでも無く、ただ漠然と今に飢えていた。

目覚めと言うほど唐突ではないがぼんやりとした曖昧な日常。ぬるま湯のように作られた今日がまた始まったのだろう。

何時も通りに作られた日常。

だが、何時もと少しだけずれた喧騒がまた始まった。

目を騒がしい方向にずらせば校門前、馬鹿丁寧なチュートリアルに捕まった少女が目映る。

確か柳洞と言う生徒会長とあれば……誰だったろうか。

どこかで見た気もするし、ただのデジャブのような気もする。

特に飛びぬけて可愛い訳ではないが、クラスで三番目に可愛い程度の容姿。

それなのに瞳は彼女をそらせない。

大体、あなたは女性だっただろうか？

何故か浮かんでは消えた思考、唐突に沸いた疑問を首を振りながら追い払う。

相も変わらぬ一方通行の会話を遠目で眺めていると少女はいきなり走り出した。

まあ、知っている仕様を説明だから無視出来るのなら無視が一番いいだろう。
スキップ

生徒会長の肩に当たりながら、脇目も振らずに全力疾走。

「……うむ、実に素晴らしい。どこから見ても文句のつけようのない

い、完璧な月海原学園の生徒の姿だ！」

説明相手の居ない、何の捻りもないテンプレート。
ノンプレイヤーキャラクター

生徒会長は誰もいなくなった虚空に向けて、高らかに独り言を朗読し続けている。

きつと彼女は気付いたのだろう、この世界こそが夢のような世界だと。

「それじゃあ、お先に待っていていましょうか」

私は彼女を追いかけるように学校へ向かい、ホームルームのチャームを聞きながら一階の廊下を歩き出した。

私がこの世界の秘密に気がついたのは何と言うことはない。

単純にバックアップがあったからだ。

私達、魔術師ウィザードは自らの魂を霊子りょうしへと変換し、霊子虚構世界や電脳世界を管理するシステムへとアクセスすることによって、その世界の理を擦じ曲げる「魔術」を使う者であるそうだ。

この仮想世界は通称「S・E・R・A・P・H」と呼ばれ、セラフ霊子で構築された仮想現実世界であり、魔術師の私になら多少の細工なら利くと言う訳らしい。

備えあれば憂い無しとはまさにこの事、どんなゲームでもこまめにセーブを欠かさない私は何時もの癖で断片的に霊子化していた手帳セのおかげで事なきを得たという訳のようだ。

いやはや、最初に手帳を開いた時は本当に驚いた。

何となく感じていた違和感の正体が世界にあったとは、そりや目が覚める度に既視感を感じる訳である。

気付いてしまえば笑い事……いや、気付いたとしても笑い事で終わらせることが出来ない。

何せ私は戦争に参加しに来たのだから。

その名も『聖杯戦争』。

戦争、それは聖杯と言うものをたった一人の勝者が手に入れる事ができるそうだと。

その聖杯とは、なんでも願い事を叶えると謳われる願望器らしい。そして戦争の名に偽りなく、敗者は電脳死するとのことだ。

断片的に手帳から伝えられた情報は曖昧であったが、成る程もし本物であるなら確かに私はこそぞって参加するだろう。

さて、先ほどからどうしても疑問形になってしまっているのはわけがある。

実はこの世界に入る際に記憶を奪われたからであるらしい。

記憶喪失、言葉にすれば四文字の単語だが実際に記憶喪失だと気付く事は難しいものだ。

元から違和感を感じ、手帳というものがあつたからこそ納得できたものの、なんの確証もなく平穏な日常を疑えとは酷ではなからうか。

これが聖杯戦争における予選だというのだから、いやはや恐れ入る。

手帳によれば約千人が参加、予選では百二十八人が勝ち残れるのだとか。

つまりこの時点で九百人程度の人間が何も知らぬまま消えてゆくわけだ。

知らずに消えてゆく、それは今から行われる本戦よりも幸せなのかも知れない。

「まあ、生きて帰れるのはただ一人なのだから進むしか道は無いのだけだ」

何時の間にか出た独り言に自傷気味に肩をくすめ、手帳に書き込まれた情報を元に私は予選会場へと歩を進める。

『一階廊下の奥には気付いた者だけに見える道がある。

そこから先は殺し合いの世界。』

行き止まりだったはずの場所には奈落のような先の見通せない入口が口を開けて待っていた。

学園生活 4日目午前中2

意気込んで入ったその先には、ただの物置きがあった。

見渡す限り一面に積もた雪のように視界を支配する物達とその中で眠るように埋もれた奥の扉。

乱雑に置かれたそれらに拍子抜けしながらも、私はまだ見ぬその先を目指すため物置を横断する。

力任せに荷物をかき分けながら海を渡るように扉を目指した。

「まさかこの荷物の海を渡ることが予選の試練じゃないわよね」

思ったよりも重労働に思わず愚痴を漏らし、悪態を付きながら息を整える。

目の前にある扉を開くため引き手に手を掛け、視線を上げるとふと気になった。

蛍光灯を背にしている私は扉に影を映している。

その私の影に首が二つ。

息遣いも聞こえなければ足音にも気付かなかった。

何時の間にか私の後ろに人が居る。

気付いてからは早かった。

反射的に手が出る、足が出ると言うのはまさにこの事。

相手に背を向けている事を利用し、振り向く動作に連動する右足。腰の回転と共に床に置かれた左足は地面を強く蹴り飛ばして、更に飛び掛る右足を加速させる。

軌道は完全な半月を描いて肩越しに見えた影の頭を射抜いた。

自分でも教科書のお手本にしたい程流れるような後ろ右回し蹴り。一連の動作は洗練されていて、人間だったら確実に意識を刈り取れる自信のある不意打ち。

そう、人間だったら。

甲冑を蹴ったような足に残る痺れ、甲高い打撃音。

人では有り得ない感触を足に残して、後ろに立った何かを蹴り飛ばす。

学校指定の内履きが振り抜かれた先で視界に飛び込んできたもの、それは紛れもなく人形だった。

「まるでB級ホラー映画ね、でもまだチャッキーの方が可愛げがあるわ」

掻き分けられた物置きの海に大の字で沈む人形。

その人形に顔はなく、目鼻の付くはずだった場所は流線型を描いてなにもない。

小麦の穂を連想させる色艶が金属の質感を主張していた。

等身大にくりぬいた人のシルエットがそのまま動き出したと言われても、納得するだろう。

冷静に人形を分析しながら左肩を前に出し、右拳は顎へ。

適度な余裕を持たせながら肩幅ほどに足を開く、私は無意識の内にファイティングポーズを構えていた。

残念ながら直ぐ手にできる場所に武器になりそうなものはない。

人形の後ろに見えるスコップが最有力候補だろうか。

相手の人形に指はない、少なくともあちらに武器を取られる心配は無さそうだ。

「それで、これが予選の試練かしら？」

答えを求めて人形に問いかける。

案の定、人形からの返答はなく、錆び付いた時計のように緩慢な動作で起き上がるだけ。

何時でも飛びかかれるよう腰を落とし、けれど踵は浮かせた戦闘態勢を取る私。

まさか魔術師が己の肉体を競うとは、面白い。

恐怖と言う文字の欠けた私に逃走の二文字は無い。

心の中で沸き上がる闘争心に微笑みながら、戦争の名に偽りなしと褒め称えた。

時計の針が固まったかのように睨み合いから動かない一人と一体。両者距離を取り合った状態から動かず、時間だけが流れていく。どれだけ時間がたったか、正確なところ私にはわからない。

だが、息の詰まる空間で私が後ろから風を感じた時、再び時間は動き出した。

吹いた一陣の風は言葉を運び、耳元をくすぐる。

「これはこの先で、自分の剣となり、盾となるもの……」

正面の人形に集中していた私は耳元で囁かれた錯覚に陥り、思わず後ろを振り返える。

すると振り向いた後ろには先程まで閉まっていた扉が無く、薄暗い海の底のような道だけが走っていた。

嗚呼、成る程。

私は勘違いしていたらしい。

顔を戻せば先ほどと変わらぬ距離で相変わらぬ棒立ちのまま動きを見せない人形。

この人形は動かないのでは無く、動けないのだ。

何が起ころのかはわからないが武器を私が求めたように、これが与えられた武器なのだ。

当たり前だが、これは魔術師の戦争だ。

魔術を競わずして何を競うのだろうか。

思わず先程の自分に苦笑してしまう。

とにかく、今は人形と共に先へ進めと言っことだろう。

踵を返すと私は暗い道の中に歩きだした。

学園生活4日目午前中2（後書き）

単語解説

『チャッキー』

アメリカの有名な映画「チャイルド・プレイ」に出てくる殺人人形。B級ホラーの中でも屈指の怖さがあり、作者は小さい頃に見てトラウマになった。

今でもチャイルド・プレイを見るのは遠慮したい。

映画「チャイルド・プレイ」は3＋2話の合計5作品出ているので気になる方は見ては如何だろうか。

『ファイティングポーズ』

左肩を前、右手は顎、足は肩幅に開く。

これは空手の基本形になる左半身を表現しようと頑張っている。裏設定で主人公の固有スキルに以下が存在している。

空手：D

空手の合理。手徒空拳における戦闘を目的とした武術をどれほど極めたかの値。

人間における上級者、何の技能も持たない一般人を殺められるレベル。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5456s/>

Fate/another EXTRA -敗北踏破

2011年4月23日00時11分発行